



国をあげての 募金キャンペーン

ノルウェー・オスロ市在住

木村 博子

ノルウェーでは毎年10月後半に国営放送NRK主催で全国的な募金活動が開催されますが、2007年度は国連児童基金ユニセフのHIV/AIDS対策が選ばれました。アフリカのエイズ患者の子供たちの状況を王妃様も皇太子妃殿下も参加されてマスコミで報道し、人口460万人余の小さな国ですが歴史的ともいえるほどの金額、2億2千万クローネ（約45億円）以上が集まりました。

募金活動はボランティア動員で、地区ごとに組織委員会が形成され、当日の日曜日には2人単位で募金箱をもって1軒ずつ回ります。さらに、電話や口座振込みでも寄付できます。小中学生も自分たちの絵画の展示販売、自分のおもちゃや手製のクッキーの販売などをして売上げを寄付し、ライオンズクラブなどの団体やスポーツクラブや企業等でもイベントを開催して収益を寄贈します。

私たちの国際女性クラブでは、各国大使館のご協力をいただいてオスロで国連の日のレセプションを毎年開催し、その収入全額と基金からの支援金をUNICEFのプロジェクトに寄贈しますが、今回はジャズ・コンサートや景品付きのくじなども追加され、総額が15万3千400クローネ（約310万円）になりました。

面白かったのは、ベルゲンの水族館のペンギンの名づけ親として

名乗り出たオスロ市がある金額を提示し、ベルゲン市側もそれに乗けないように高い額を提示したゲームのような寄贈合戦もありました。有名人の時間レンタルや選手が寄贈したサイン入りのサッカーボールやシャツのオンライン競売もあります。著名なアーティストが出演するコンサートや文化イベントも各地で開催され、これらがエイズ・プロジェクトや現状の映像とともに、テレビ・ラジオを通じて午後から深夜まで続けて報道されます。寄付は地方単位に金額番付で公表され、最後に最終総額が発表され贈呈されます。

私のノルウェー

「ノルウェーはどういうところがユニークで、自分はどこが好きなのだろうか」ということを最近考えています。歴史・文化史的な背景、思想面での遺産、法律や社会制度を現状に適応させて常時調整していること、マスコミの社会意識と高度な紙上討論、公開性、表現の自由を大切にする社会、ジャーナリスト達の使命感、教育や体験を通じて子供の時から養成される政治への関心と社会参画、尊敬できるすばらしい知識人が多数いることなどがあげられます。

昨年のノーベル平和賞は国連の「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」とアル・ゴア氏に授与されましたが、その授賞式が開催されたオスロ市庁舎内の一室の壁



国際女性クラブの現会長。青い民族衣装に赤い縁取りが美しい



日本のコーナー



2007年度ノーベル平和賞受賞者発表の日

画には「自由・平等・友愛」がフランス語とノルウェー語とで絵解きのように描かれています。上記の全国的な募金活動が行われる国民性の背景にも、無関心・我執ではなく、同じ地球に共存する「人間どうし(medmenneske)」としての同胞意識、人道・人権の価値観、助け合い、社会責任感などがあり、指針となるような人類の価値が最近のノーベル平和賞にも表れていると私には感じられるのです。